48)『病草子』にあらわれた歯科疾患風俗に関する一考察　第三報

A Study on Manners & Customs of Dental Disease in "Yamai-no-Soshi" 3 'rd Report

池園歯科研究会　○湯浅高行，藤野珦男
日本歯科大学　　屋代正幸

Takayuki YUASA, Yoshio FUJINO and Masayuki YASHIRO

『病草子』は，平安末期頃に成立したといわれている絵巻物で，六道輪廻の苦相をあらわしたといわれている．このような種類の絵巻物で，『地獄草子』，『餓鬼草子』があるが，人間の実像を描いている点で，他の二つと世界を異にするという考え方も存在する．成立は，後白河上皇と密接な関連が指摘されているが，はっきりしたことは不明といわれている．今回，歯科領域に属する内容の絵として，主に「こしたのある男」についての検討を試みた．

この絵の前段に，「こしたといひて，したのねにちゐさきしたのやうなるもの，かさなりておいゝづることあり．やまひおもくなりぬれば，はらにはうゑたりといへども，のむど飲食をうけず，おもくなりぬれば，しぬるものなり．」との条文が存在している．

この絵についてみると，烏帽子姿の男が着衣をはだけて肋骨の浮きでた胸を見せ，足を前方になげ出し，少しのけぞる姿で，画面中央の男に口を開けて見せている．その「こした」を患う男の腹に注目すると，胸に対し，腹部が膨満していることから，条文にあるように「飲食をうけず」と対応し，症状は相当にすすんでいることが推察される．このことは，中央の少し老けた風折烏帽子をつけた男が左手で脈診をとり，右手人示指で「こした」を示して沈痛な表情をしていることからもうかがえる．この画面の中央の男は，「こした」のある男の父親という考え方もあるが，脈診をしていることから医師と考えてよいと思われる．また，画面右側の坊主頭の男は，灸師と考える説と，かたわらで食事をしている説と二説存在する．坊主頭の男の視線は口腔内の「こした」にそそがれ，かなり緊張した顔貌を呈している．さらに，「こした」のある男のくるぶしには，赤い灸とみられる様子が図示されている．この位置は，灸点ならば，崑崙と考えられ，舌の病に効く特効穴ではないが，相当に虚しているために使われた経穴と考えられる．以上のことから，この坊主頭の男は，灸師と考えてよいと思われる．この坊主頭の男に，右手にははしを持ち，そのはしの先端は黒く焼けこげ，周囲にはもぐさの灰とおぼしきものがちらばっている．一般的には，はしでもぐさをすえることは難かしく，また火を点ずる線香も必要と思われる．この男の左手は人示し指と親指が交叉しているところがもぐさをひねっているとも考えられるが，この位置で線香をもっていたが何らかの理由で削落したとも推察される．

「コシタ」については，『諸病源候論』の重舌候，『医心方』巻五，治重舌方第五十五，『以呂波字類抄』，『和名類聚抄』巻三にその記載がみられる．「コシタ」は，重舌と同一であるか問題のあるところであるが，その症候と，重舌を「ジュウゼツ」，「コシタ」と二通りの読み方があることから考えて，同じといってよいと考える．

重舌は，服部敏良氏らによれば，ガマ腫と呼ぶものに相当すると述べられている．事実ガマ腫は粘液貯留嚢胞で，発現部位は舌下型が多く，悪化した場合は舌の挙上による嚥下障害や呼吸困難をきたす場合がある．舌下型の同様な症状に口腔底炎があり，これは歯性感染症が口腔底の組織隙に拡がり，ここに膿瘍が形成される．口腔底炎には，限局性の口底膿瘍と急速に症状がすすむ口腔底蜂窩織炎の二種類が存在する．この初期症状は，口腔底の発赤・腫脹・疼痛とともに，二重舌が認められ，重篤になれば開口障害，嚥下障害をきたし，さらに全身症状も強くあらわれ，死に至る場合もある．また，重舌は線維腫との考え方もあるが，重舌は一つの症候群をさすものであり，現代の病名にあてはめて同定するのは，まったく概念が異なることと考える．